

乳腺腺様嚢胞癌の一例

◎双和 宏樹¹⁾、田村 ひろみ¹⁾、増田 弘明¹⁾、井原 かおり¹⁾、眞鍋 朋美¹⁾
社会福祉法人恩賜財団 大阪府済生会 富田林病院¹⁾

【はじめに】

乳腺に発生する腺様嚢胞癌は極めて稀で、全乳癌の約0.1%とされている。ER、PgR、HER2が陰性のトリプルネガティブであるにも関わらず、リンパ節転移や遠隔転移が少なく、予後良好である。今回我々は、乳腺原発の腺様嚢胞癌を経験したので報告する。

【症例】

70代女性、乳房に痛みあり、乳腺症様硬結を認めたため精査。エコー検査で右乳腺の10時方向に8.4×8.9×8.9mmの腫瘤を認めた。形状：不整形、境界：明瞭粗ざら、内部エコー：不均一、後方エコー：不変、随伴所見：前方境界線断裂(-)、血流：(-)のカテゴリー4であった。CT、MRIでは乳房内伸展を伴った乳癌と診断された。

【細胞所見】

核小体明瞭で粗いクロマチン増量の見られる、小型で類円形を有する腺上皮細胞と筋上皮細胞が不規則重積性に見ら

れた。全体的に核の大小不同、核異型は軽度であった。他の乳癌と比べて、異型は弱い印象であった。

【組織所見】

浮腫状～硝子様の間質を背景に、クロマチン増量やN/C比の大きな楕円形～類円形の異型核、明瞭な核小体が見られ、弱好塩基性～弱好酸性の胞体を有する腫瘤細胞が小型～中型の胞巣状、不規則な索状を呈して浸潤性に増殖していた。胞巣内には、小型の管状様構造が散見され、腺様嚢胞癌と考えられた。

【まとめ】

腺様嚢胞癌は唾液腺に好発するが、乳腺においてもごく稀に発生するため、念頭に置く必要があると考える。また予後良好であるため、過剰な治療を避けるためにも、細胞診、組織診での確に診断することが重要である。

済生会富田林病院 0721-29-1121